様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１２９２２

研究課題名（和文）1950-60年代日本の「文学と革命」をめぐる批評言説の変容と展開

研究課題名（英文）Transformation of Japanese critical discourse on 'literature and revolution' in the 1950s and 1960s

研究代表者
木村　政樹（Kimura, Masaki）

東海大学・文学部・講師

研究者番号：９０８６９６７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：戦前期の日本では、プロレタリア文化運動などの場において「文学と革命」という問題が議論されていた。この「文学と革命」をめぐる批評言説は、1950-60年代に変容していく。それは戦後のジャーナリズムと政治の変化に対応しながら、多数の作家たちのネットワークによって生み出されたものであった。本研究では、戦前期から続く批評言説の文脈を捉えながら、その変容のあり方を捉えようと試みた。この試みは、日本の人文知のあり方を再考するための手がかりとなると考えられる。研究を通して明らかになった成果は、書籍、学術論文などで公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の主な成果は、書籍や論文などの形で発表した。単著としては、『革命的知識人の群像――近代日本の文芸批評と社会主義』を刊行し、人文系の議論に関心がある読者に向けて批評史研究の成果を届けることを狙った。また、専門分野においては、『日本近代文学研究』『昭和文学研究』などの学会誌に論文を発表したり、研究発表を行なったりすることで、近代の批評史を問い直すことの意義を問うた。そのほか、『日本近代文学大事典』増補改訂デジタル版の第一期から第三期公開にかけて13の項目を執筆し、調査研究の成果を広く一般に還元しようと試みた。

研究成果の概要（英文）：The issue of 'literature and revolution' was discussed in fields such as the Japanese proletarian cultural movement. This critical discourse transformed in the 1950s and 1960s. It was the product of a network of many writers responding to changes in journalism and politics. This study attempts to capture this transformation in the prewar and postwar periods and provides clues for rethinking Japanese humanities. Through this research project, I have published my research findings in books and academic papers.

研究分野：日本近代文学

キーワード：文学と革命　批評言説　文化運動　概念史　メディア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

戦後日本において文芸批評は、人文的な知が孕む可能性やその存在意義に関わるテーマを問う営みとして、独自の社会的な役割を担っていた。具体的には、民主主義や主体性などの戦後思想の中心的な価値を体現する言説であったとみなされてきたといえよう。

私はこれまでに、戦前・戦後日本における知識人論と文学史の変遷を研究し、文芸批評と社会主義の関係について論じてきた。その結果、いくつかの個別的な成果を得たが、大きな視点からみたときの研究の意義としては、概念史の研究という観点から、狭い時期区分にとらわれずに日本の思想を捉え直したことにある。

こうした調査・分析を進めていくなかで、1950-60 年代の「文学と革命」をめぐるテクストが持つ重要性が浮かび上がってきた。従来の戦後批評史研究は、当該期の「文学と革命」に関して多くの知見をもたらしたが、「戦後日本」という限定を越えたスケールでその特質を捉えることが難しかった。それに対して私は、「文学と革命」をめぐる批評言説を理解するためには、明治以降の翻訳語・新語の概念史的な変容と、文学・思想をめぐるリテラシーの複層性を歴史的に把握しなければならないと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、1950-60 年代日本の「文学と革命」をめぐる批評言説の変容と展開を考察することにある。その際、概念とメディアの観点から言説を論じ、批評用語の通時的な論脈についても考察を行なうことで、明治以降の日本近代史を広く見通すパースペクティヴを確保する。そうすることで、戦前・戦後の言説の変容や、文学史・思想史が再構成されるプロセスが立体的に把握できると考えられる。

３．研究の方法

本研究では大別して、ジャーナリズムと文化運動関連文献の調査・分析と、個別の作家・思想家についての研究を軸として進めていく。研究対象としては、左派の新聞・雑誌メディア、文化運動関連文献、『近代文学』派の批評家や民主主義文学運動の関係者、『近代文学』派以降の世代の批評家の言説を取り扱う。その際に、文学・思想に関連するキーワードの歴史に注目した概念史的な考察を行なう。概念の連関の様態は具体的なネットワークの追跡により明らかになることが多く、分析に先立ってその考察の範囲を設定することが難しいが、調査にあたってはいくつかの言説の結節点を想定しておく必要がある。そこで、2021 年度は「国民文学」、2022 年度は「近代文学」、2023 年度は「市民社会」概念を調査対象の軸として周囲の批評言説を追跡し、コンテクストを再構成していくこととする。なお、本研究の主眼は「文学と革命」をめぐる批評言説の構造を明らかにすることにあり、個別の作家やテクストそのものの内在的探究にはない。調査の結果次第ではこの目的に沿った研究計画の柔軟な方針の変化を予定している。

４．研究成果

まず、本研究において公表した主要な研究成果について以下に記す。

単著としては、初年度において『革命的知識人の群像――近代日本の文芸批評と社会主義』（青土社、2022 年）を刊行した。本書は概念史のアプローチによる批評言説の研究であり、戦前から戦後の革命的知識人たちの思想と実践を考察したものである。とりわけ、「知識人」関連語群と文学史の形成に焦点を当てて分析したが、「文学と革命」という問題系についても新たな観点から再考するものであった。本書で第 2 回東京大学而立賞を受賞した。また、本書はいくつかの書評で高く評価された（たとえば、『図書新聞』2022 年 7 月 9 日の村田裕和氏の評、『日本文学』2022 年 10 月の和田崇氏の評、『昭和文学研究』2023 年 3 月の位田将司氏の評、『有島武郎研究』2023 年 5 月の大久保健治氏の評）。また、2022 年には本書を取り上げた読書会や書評会が行われるなど（「芸術運動と知識人」研究会第 2 回例会、初期社会主義研究会 8 月例会、日本社会文学会関東甲信越ブロック 12 月オンライン例会）、関連する研究領域において一定のインパクトを与えたと考えられる。『中央公論』2022 年 5 月の赤井浩太氏の評、『日本近代文学』2022 年 11 月の大杉重男氏の評といった、本書に対する批判的な書評もあったが、これに対しては具体的に応答することを通して、本書での考察をさらに進展させることができた。この点は後述するが、以上のことを総合的に鑑みるならば、本書は日本近代文学研究およびその周辺領域において近代日本の批評に関する議論を活性化させることを通して、学術的な貢献を果たすことのできた著作であったといえよう。

また、本研究では批評言説の歴史を捉えるために複数の作家・思想家を研究対象に据えたが、その作業は、批評家の履歴を鳥瞰して記述する文学事典の項目執筆と相性がよいものであった。『日本近代文学大事典』増補改訂デジタル版では、第一期から第三期公開にかけて 13 の項目を執筆することを通して、成果の一端を広く一般読者に向けて公表した。担当した項目は、「平野謙」「本多秋五」といった『近代文学』派の批評家だけでなく、「佐伯彰一」「福田恆存」といった保守系の批評家や、「奥野健男」「高橋義孝」「篠田一士」「高橋英夫」「加藤典洋」など広範に

活躍した様々なタイプの批評家が含まれており、特定の流派に留まらない思想潮流を概観することができた。

加えて、個別作家の批評に関する研究としては、「一九五〇年代の埴谷雄高における結核と文学」(『昭和文学研究』2022 年 3 月）において、『近代文学』派の埴谷の 1950 年代の批評を『近代文学』や『群像』といった雑誌との関連で捉えた。このようなメディアに着目した観点から分析することで、戦後ジャーナリズムの動向のなかで埴谷という個別作家の営為を位置づけることができた。

そのほか、戦前期から戦後の初期にかけて通時的に「文学と革命」をめぐる批評言説を見ていく試みを継続し、その成果の一部を、「将棋と革命――野間宏「暗い絵」論」(『湘南文学』2022 年 3 月)、「文芸の「評価」をめぐって――本多秋五「文芸史研究の方法に就いて」論」(『日本近代文学』2022 年 5 月）として発表した。戦後に発表された「暗い絵」は戦時期を主な作品の時代背景としており、「文学と革命」に関する通時的な変容がテクストの内外に刻み込まれている。他方で、プロレタリア文化運動時代の本多の批評は、戦後批評のキーワードである「人間」の系譜を遡った際に見出されるものでもある。両論文で明らかにした言説のネットワークは、戦後批評が形成される理路の複雑さを解明するための手がかりを与えてくれるだろう。

さらに、こうした言説の展開の前提として、関東大震災前後における革命的知識人の転換が存在していることに注目し、「関東大震災前後と革命的知識人――有島武郎と日本共産党をめぐる一考察」(『現代思想』2023 年 8 月臨時増刊)、「階級について語るとはいかなることか――晩年の有島武郎について」(『有島武郎研究』2024 年 5 月）を発表した。この 2 つの論文では、有島武郎と福本和夫についての考察を通して、「野生の知」から「実験室の知」へと「革命的な知のトポグラフィー」が移行したという説を提示している。このような革命的知識人の範例の変容は、戦後の知識人が自己形成するための土壌となっていたといえよう。たとえばそれは、有島から平野への系譜という形で考察することができる。この点については、有島武郎研究会没後 100 周年第 73 回全国大会での研究発表「階級について語るとはいかなることか――有島武郎と平野謙をめぐって」で論じた。戦後批評は戦前期からの批評用語の変容のなかで展開されるため、その点に留意して通時的かつ共時的に「文学と革命」のコンテクストを再構成しなければならないが、その際には戦前期の概念がどのように戦後において再構成されたのかを具体的に分析することが極めて重要であると考えられる。

以上のように、本研究ではその成果を学術論文や研究発表によって公表してきた。他方で、研究課題を遂行していくにあたっては、調査・研究の試行錯誤や研究の方向性の変更も行われた。まず、前述した「国民文学」概念などの概念史に関しては、戦後の諸論争や批評ジャーナリズムの動向のなかで位置づけるにあたって、さらに理論的な考察が必要であることが研究を進めていくなかで痛感された。それらの考察の成果をまとめて論文化することは研究課題の期間内に実現できておらず、今後の課題として残されている。とりわけ、概念史研究を更新するにあたっては、従来の思想史研究とは別の新しい視座を打ち出すために、研究の方法について理論化する必要があることがわかった。こうした理論的・方法的な探究については、先述した拙著に対して行われた批判とも関連する。批判に対して応答するなかで、研究の方法を深め、練り上げていかなければならないという問題意識が生じた。

以上のような事情によって、本研究では、批評史研究の方法そのものについて論文化することとなった。これは当初の研究計画では想定していなかったことであったが、実際に研究を進めるなかで見出された新しい課題として取り組むこととなった。

その成果は主として、「批評とはなにか――「革命的批評」から再考する」(『湘南文学』2023 年 3 月）および「エピステモロジー的「批評」研究の〈対象／方法〉論」(『湘南文学』2024 年 3 月）にまとめた。まず、前者では、現在の批評ジャーナリズムの問題関心とも接続させるかたちで、「批評とはなにか」という問いに答えることによって、批評史研究の方法を提示した。ついで、後者では、「エピステモロジー的「批評」研究」という方法論を提唱し、オーソドックスな批評史研究とは異なる理論的基盤の構築を試みた。こうした方法的探究は今後も継続していく予定である。

また、上記の論考とも関連するものとして、「「将棋と文学研究」について――文学史とは別の仕方で」(『将棋と文学スタディーズ 2』将棋と文学研究会、2023 年 3 月）では、ミシェル・フーコーの方法を参考にした方法的な考察を行なっている。また、有島武郎に関する 2 つの前掲論文では、「革命的な知のトポグラフィー」という概念を提出しているが、これは拙著『革命的知識人の群像』では用いられておらず、批評史研究の方法論の探究と並行して考案したものである。これらの論文では、革命的知識人の変転について、思想の変化というよりも、革命的知識人の範例やゲームの変化として捉える視座なども導入したが、そこでは実践的に方法的な探究も行なっている。

このようにして本研究課題を 3 年間にわたって継続することで得られた知見は、大まかな研究の方向性としては以下の 2 点によって成立している。1 点目は、拙著『革命的知識人の群像』に結実し、その後も継続している、これまでの私の研究の延長線上に生み出された知見である。それは主に、文芸批評と社会主義に関する概念史的な研究と、批評をメディア実践として捉える観点を接合する考察であったといえる。ただし、拙著においてすでに、社会主義の影響を受けた

文芸批評を「革命的批評」として概念化したうえで、文芸批評に関する理論的な考察も行なっていた。拙著の「革命的批評」に関する議論は、その後の理論的な探究の出発点となっている。2点目は、『革命的知識人の群像』以後に新たに生じた方法論的課題に伴う知見である。それは方法論としては「エピステモロジー的「批評」研究」として、実践的には「革命的な知のトポグラフィー」についての議論として展開した。2点目は1点目と矛盾するものではなく、それを発展させたものだといえる。今後は今回の調査・研究で得られた成果をふまえ、さらに考察を深めていくことを予定している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 木村政樹	４．巻 31
２．論文標題 新刊紹介　田中ひかる編著『社会運動のグローバルな拡散――創造・実践される思想と運動』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 初期社会主義研究	６．最初と最後の頁 312-314
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村政樹	４．巻 51(10)
２．論文標題 関東大震災前後と革命的知識人　有島武郎と日本共産党をめぐる一考察	５．発行年 2023年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 101-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村政樹	４．巻 59
２．論文標題 エピステモロジー的「批評」研究の〈対象／方法〉論	５．発行年 2024年
３．雑誌名 湘南文学	６．最初と最後の頁 51-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木村政樹	４．巻 106
２．論文標題 文芸の「評価」をめぐって――本多秋五「文芸史研究の方法に就いて」論――	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本近代文学	６．最初と最後の頁 80-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19018/nihonkindaibungaku.106.0_80	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木村政樹	4．巻 58
2．論文標題 批評とはなにか――「革命的批評」から再考する	5．発行年 2023年
3．雑誌名 湘南文学	6．最初と最後の頁 28-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木村政樹	4．巻 2
2．論文標題 巻頭言　「将棋と文学研究」について――文学史とは別の仕方で	5．発行年 2023年
3．雑誌名 将棋と文学スタディーズ	6．最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木村政樹	4．巻 6
2．論文標題 書評　山根龍一著『架橋する言葉――坂口安吾と時代精神』	5．発行年 2023年
3．雑誌名 坂口安吾研究	6．最初と最後の頁 141-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木村政樹	4．巻 53（10）
2．論文標題 「知識人」と「知の巨人」 二〇二一年、立花隆から考える	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ユリイカ	6．最初と最後の頁 187-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木村 政樹	4．巻 84
2．論文標題 一九五〇年代の埴谷雄高における結核と文学	5．発行年 2022年
3．雑誌名 昭和文学研究	6．最初と最後の頁 107～119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50863/showabungaku.84.0_107	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木村政樹	4．巻 57
2．論文標題 将棋と革命――野間宏「暗い絵」論	5．発行年 2022年
3．雑誌名 湘南文学	6．最初と最後の頁 113-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木村政樹	4．巻 27
2．論文標題 階級について語るとはいかなることか――晩年の有島武郎について――	5．発行年 2024年
3．雑誌名 有島武郎研究	6．最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 木村政樹
2．発表標題 階級について語るとはいかなることか――有島武郎と平野謙をめぐって――
3．学会等名 有島武郎研究会
4．発表年 2023年

１．発表者名 木村政樹
２．発表標題 対馬の砲台跡という〈歴史〉
３．学会等名 「芸術運動と知識人」研究会
４．発表年 2024年

１．発表者名 木村政樹
２．発表標題 著者からの応答／木村政樹『革命的知識人の群像　近代日本の文芸批評と社会主義』「第Ⅲ部 文学史の整理」公開読書会
３．学会等名 「芸術運動と知識人」研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 木村政樹
２．発表標題 資料紹介・北條秀司著『王将』（抜粋）
３．学会等名 将棋と文学研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 木村政樹
２．発表標題 著者同士による相互批評、著者による応答／「社会主義と文学」について考える――木村政樹著『革命的知識人の群像』と大和田茂著『日本近代文学の潜流』をめぐって
３．学会等名 初期社会主義研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 木村政樹
２．発表標題 報告（ゲスト）／【合評会】 山根龍一『架橋する言葉―坂口安吾と時代精神』
３．学会等名 坂口安吾研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 木村政樹
２．発表標題 資料紹介・野間宏「暗い絵」（抜粋）
３．学会等名 将棋と文学研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 木村政樹
２．発表標題 著者同士による相互批評、著者による応答／大正知識人の諸問題―有島武郎と広津和郎
３．学会等名 日本社会文学会関東甲信越ブロック（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 木村政樹
２．発表標題 「芸術と革命」をめぐる葛藤――一九二〇年代の小林多喜二の評論活動を中心に――
３．学会等名 生誕120年没後90年記念 小林多喜二国際シンポジウム in 東京2023（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 木村政樹
２．発表標題 発表／書評会　大田英昭『日本社会主義思想史序説――明治国家への対抗構想』
３．学会等名 東京大学東アジア藝文書院主催（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 木村政樹
２．発表標題 雑誌『先驅』と知識階級論
３．学会等名 20世紀メディア研究所
４．発表年 2021年

〔図書〕　計5件

１．著者名 日本近代文学館編（木村政樹）	４．発行年 2024年
２．出版社 JapanKnowledge ネットアドバンス社	５．総ページ数 -
３．書名 『日本近代文学大事典』増補改訂デジタル版　第三期公開　（担当：「饗庭孝男」「樋口覚」）	

１．著者名 日本近代文学館編（木村政樹）	４．発行年 2022年
２．出版社 JapanKnowledge　ネットアドバンス社	５．総ページ数 -
３．書名 『日本近代文学大事典』増補改訂デジタル版 第一期公開（担当：「上田三四二」「加藤典洋」「佐伯彰一」「篠田一士」「高橋英夫」「福田恆存」「本多秋五」）	

１．著者名 安藤宏、大原祐治、十重田裕一編集代表（木村政樹）	４．発行年 2022年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 828
３．書名 坂口安吾大事典 （担当：「戦後新人論」「便乗型の暴力」「荒正人」）	

１．著者名 日本近代文学館編（木村政樹）	４．発行年 2023年
２．出版社 JapanKnowledge　ネットアドバンス社	５．総ページ数 -
３．書名 『日本近代文学大事典』増補改訂デジタル版 第二期公開 （担当：「奥野健男」「桶谷秀昭」「高橋義孝」「平野謙」）	

１．著者名 木村政樹	４．発行年 2022年
２．出版社 青土社	５．総ページ数 352
３．書名 革命的知識人の群像 近代日本の文芸批評と社会主義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関